

わたしたちの記憶をつなぐ神奈川の建物

～県立図書館新棟はわたしたちの新たな記憶の器になり得るか～

Lib活 県民が編むかながわの半世紀 第4期 小関 忍

1. はじめに

神奈川県立図書館は2022年(令和4年)に新しい本館(以後、新棟)を開設し、2025年(令和7年)12月現在、旧本館(写真1)を前川館として再整備している。旧本館は内山岩太郎知事の戦後復興の文化政策として県民に精神的な幸福をもたらす目的[1]で建てられた。日本の近代建築の巨匠前川國男の設計によるモダニズム建築の代表作で、終戦直後の物資に限られた状況下で作られた、機能的にもデザイン的にも優れた建物である。旧本館には外光が差し込む明るい閲覧室(写真2)があるが、それは前川國男の特徴であり、筆者は江戸東京たてもの園に保存されている前川の自邸を思い出した。建築史家の藤森照信は「建物は記憶の器である」と述べている[3]。愛着のある建物は私たちの記憶をつなぎ、訪れた人々の思い出が詰まっている。



写真1 県立図書館 前川館

そんな県立図書館にも危機があった。2012年(平成24年)の県の緊急財政対策案の中で閲覧、貸出サービスの廃止などコストカットの対象とされたのだ。その後県民の大反対で方針が変更され、新棟建設と旧本館の改修を含む現在の再整備方針[4]が作られた経緯がある。



写真2 旧本館閲覧室[2]

本レポートでは、戦後から高度経済成長期以降にかけて建てられた神奈川の公共施設を対象に、更新時期を迎えた建物が保存されるかどうかの分岐点における、わたしたち県民の関わり方を探る。そして時代と共に図書館の位置付けが変わる[5]中で、「価値を創る図書館」と位置付けられた県立図書館の新棟が今後わたしたちの記憶をつなぐ器となり得るか考察する。

2. 公共施設の再整備と市民の関与

ハコモノ行政と言われるように高度経済成長期からバブル期にかけて国内で多くの公共施設が建てられた。神奈川も例外ではない。それらの建物が今後一斉に更新時期を迎えると、建物の維持管理費が財政を圧迫する。そこでまず公共施設の再整備と市民との関わりを概観する。

2.1 公共施設マネジメント

公共施設に関する財政負担の軽減・平準化と最適な配置の実現を目指し、神奈川県は2017年(平成29年)に「神奈川県公共施設等総合管理計画」(以下総合管理計画)[6]を策定した(令和4年改訂)。総合管理計画の対象とする施設は幅広いが、ここでは県立図書館を含む「庁舎等施設」に注目する。

総合管理計画によると、庁舎等施設の主な227施設の内、建築後30年以上の建物が約58%を占める。高度経済成長期と平成バブル期にそれぞれ3割ずつ建設されている。

一般的に建築後30年以上を経過した施設は、大規模な改修工事によるリニューアルや建て替えが検討される。総合管理計画では高度経済成長期に建設された施設の統廃合と、バブル期に建設された施設の長寿寿命化に力を入れている。総合管理計画の基本理念は、県民が安心して安全かつ快適に利用できる公共施設を経済的なコストで適切に提供することであり、機能やサービスの向上は検討されるが、建物の価値や市民の思い出といった情緒的、文化的観点は見られない。

公共施設の建設年の例として横浜市と相模原市の公開データを見る。表1は横浜市内18の市立図書館のリスト[7]で、なんと17館が建設後30年を過ぎている。相模原市内に4つある図書館の竣工年[8]も表2のように橋本図書館以外は相当に古い。どちらの市も図書館の再整備を現在計画中である。

2.2 戦後の建物の保存に向けた専門家の思い

行政による公共施設マネジメントと建築の専門家の建物に対する思いは異なっている。2012年(平成24年)に開催された講演会で、東京工業大学教授の藤岡は保存論について述べている[9]。建物の保存は既存のモノに何らかの意味づけをしつつそれを継承していく行為であり、残すことはつくることで文化価値の創造である。また同講演会で前川建築設計事務所代表取締役の橋本は、前川國男の建築は長く現役で使われている[10]と指摘し、長く使うことにより育まれる一体感、記憶、大切にしている気持ちが建物を育てると述べている。建物を使い続けて価値を創りながら適切に保存していく。効率重視の行政とは逆の考え方である。

2.3 公共施設計画、再編における市民参加

公共施設再編における市民の関わり方についての先行研究を紹介する。東大の小幡[11]は公共施設再編における住民参加の効果は、施設に対する愛着を醸成し、公共施設管理やまちづくりへの責任感が向上することにあるとした。千葉大の高野[12]は市民参加によって計画された公共施設の計画段階のプロセスを持続させるには、開館後の施設運営に参加する主体的な市民の存在と運営体制、ルール、およびそれらの継承が重要とした。建築家や施設側の関係者だけでなく、利用者も施設の再編計画から開館後の運営に関わることで施設に対する愛着や責任感を持ち、また開館後も長く運営に関わっていくことで、施設を活性化することができる。

表1 横浜市内立図書館[7]

施設名称	所在区	竣工年度
旭図書館	旭区	1986
泉図書館	泉区	1988
磯子図書館	磯子区	1999
神奈川図書館	神奈川区	1987
金沢図書館	金沢区	1980
港南図書館	港南区	1986
港北図書館	港北区	1960
栄図書館	栄区	1989
瀬谷図書館	瀬谷区	1984
中央図書館	西区	1994
都筑図書館	都筑区	1995
鶴見図書館	鶴見区	1979
戸塚図書館	戸塚区	1978
中図書館	中区	1989
保土ヶ谷図書館	保土ヶ谷区	1982
緑図書館	緑区	1995
南図書館	南区	1992
山内図書館	青葉区	1976

表2 相模原市内立図書館[8]

施設名称	所在区	竣工年度
橋本図書館	緑区	2001
図書館	中央区	1974
相模大野図書館	南区	1989
図書館相武台分館	南区	1979

3. 事例研究

筆者は神奈川県内で改修を終えた建物や、これから再整備が始まるいくつかの建物を実際に訪れた。再整備に至る経緯を、建物の写真と現場で感じた雰囲気と合わせて紹介する。

3.1 神奈川県立近代美術館

鎌倉鶴岡八幡宮境内にある旧県立近代美術館 鎌倉館(写真3)は、内山岩太郎知事の政策の一つとして1951年(昭和26年)に建てられた。設計は前川國男に並ぶモダニズム建築の巨匠坂倉



写真3 旧県立近代美術館 鎌倉館

準三である。2016年(平成28年)に土地の賃貸借契約満了に伴い閉館となったが、鶴岡八幡宮が民意を受けて建築の保存継承を決定し、大規模改修を経て鎌倉文華館鶴岡ミュージアムとして生まれ変わった。建築家の内藤廣は、ここを運動部で過ごされた中学生の頃に我を取り戻すホッとできる場所として記憶していると語っている[13]。筆者が訪れたのはハスの季節だった。平家池に張り出すピロティと直線で構成された外壁が特徴の、こじんまりとした佇まいが当時の面影を忍ばせる。

3.2 横浜文化体育館

横浜開港100年祭の記念事業として1962年(昭和37年)に竣工。文体と呼ばれ1964年(昭和39年)の東京オリンピックのバレーボールやプロレス興行など多くのイベントが行われた[14]が、2020年(令和2年)に施設の老朽化と関内駅周辺地区の再整備プロジェクトの一環で閉館した。



写真4 横浜BUNTAI

2024年(令和6年)に跡地に横浜BUNTAI(写真4)がオープンした。閉館時には市民や関係者から成るファイナル事業実行委員会が組織され、思い出募集や記念誌作成、見学会の開催、壁面への寄せ書きなどが行われた[15]ことから、文体が多くの市民にとって記憶の場であったことがうかがえる。

筆者もLib活受講者からバトントワリング大会や卓球の試合に参加したとの複数の体験談を伺った。また現地を訪れたところ、横浜BUNTAIの階段や通路に過去のイベントの記録が刻まれ、事務所には当時の写真が飾られていた。せめてもの思いは分かるが、建物が無ければ利用者の記憶は薄れていくだろう。

3.3 藤沢市民会館

1968年(昭和43年)に建設され藤沢市の文化発信拠点として多くの市民に利用されてきた。建設から50年以上が経過して建物調査や財政面、市民意見などを総合的に判断し、建て替えによる再整備を決定[16]した。現在の建物(写真5)は2026年(令和8年)3月末で閉館となる。

再整備基本構想策定までの経緯を説明する市のWebサイトには市民から集めた声として階段やホールの座

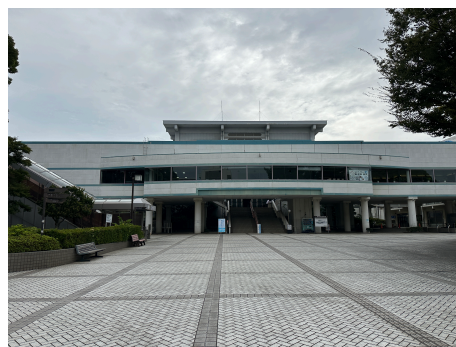


写真5 藤沢市民会館

席、トイレの混雑、舞台などへの不満が多く取り上げられている。建て替え後は複合施設になるらしい。新しい施設への期待に誘導する意図があるのかもしれないが、既存の建物に結びつく市民の思い出を残そうという考えはないように見えた。

筆者が現地を訪れて見たところ、閉館を前に館内に市民の思い出や感謝を記した付箋が数多く貼られていた。それらの記憶が建物とともに失われてしまうことを残念に思う。

4. 新しい図書館の役割

これからの県立図書館を考えるために、図書館の利用者層や県立図書館の再整備の考え方と新棟の設計についてまとめる。

4.1 図書館利用者層の変化

佐藤[17]は国立国会図書館が実施したアンケート調査のデータを分析して、図書館利用者のクラスタリングを行った。2014年(平成26年)のデータでは、仕事を引退した比較的年齢が高く、情報拠点・コミュニティ基盤として図書館を愛好する層が一定数いた。しかしコロナ禍を経た2020年(令和2年)のデータで分析したところ、その層の人数が半減した一方で、意識が高い20代、30代の若者層が増えていることが分かった。この層は図書館の利用頻度は高くないものの、勉強場所、仕事場所としての利用が多いという特徴がある。多趣味・多読で文化的アクティビティーにも積極的である。これまでの図書館関係者からは疎まれる存在かもしれないが、図書館の場所としての価値を理解しているのはそのような新たな利用者層であり、ニーズの変化に合わせた図書館サービスを見直す機会と捉えるべきであろう。

4.2 県立図書館の再整備に向けた基本的な考え方

県教育委員会は2016年(平成28年)に「県立図書館の再整備に向けた基本的な考え方」[4]を取りまとめた。従来の専門的図書館、広域的図書館としての基本的な役割はそのまま、新たに、来館することで本を介して人と人が交流し学びを支援する価値を創造する図書館、モダニズム建物の魅力を活かした人を惹きつけ人が訪れる魅せる図書館の2つの図書館像を付加した。そして価値を創造する図書館は旧本館と同じ紅葉ヶ丘地区に新棟を建設、旧本館は魅せる図書館として改修するとした。



写真6 県立図書館新棟

4.3 県立図書館新棟の設計

写真6の新棟の設計は旧本館への敬意を払いつつ新しい図書館のあり方が熟考されている[18]。建築意匠設計を担当した石井秀明は、ホローブリック(穴の空いたブロック)やプレキャストコンクリートルーパーなど外観を特徴づけている旧本館のエッセンスを抽出し、前川男の建築との連続性を意識しながら設計した。写真7のように旧館のホローブリックがよい感じで新棟の木の格子に写し取られ、直射日光を避けながら光を取り入れている。またロゴマークもホローブリックがモチーフであり、館内の家具も県立図書館の歴史や経緯を踏まえてデザ

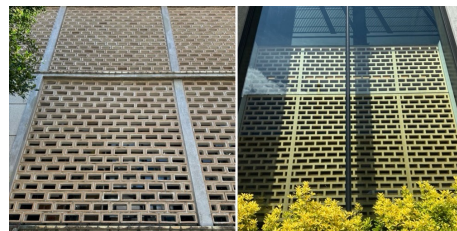


写真7 旧館(左)と新棟(右)の比較

インされている。新棟建築プロジェクトを指揮した幅允孝は、図書館の内と外の境界を曖昧にして、多くの方が来館して知らない本を手にする機会を増やすことを狙ったという。

4.4 Lib活

Lib活は新棟開設を機に始まった企画であり、さまざまな学びのスタイルを実現する新棟4階フロアを利用するモデル事業[19]と位置付けている。Lib活をエリアの利用の見本として示すことにより、将来的には自主活動による利用を活性化することを目指している。図書館を利用していない層を中心にサードプレイスとして認知され、質の高い学びの場として活用されることを目指していることから、その対象は新しい図書館の利用者層に合致するものと考えられる。

4.5 新棟の外部評価

神奈川の県立図書館を考える会は神奈川県立図書館の改廃問題を受けて有志により発足し、政策変更がなされた今も県立図書館のあり方に注視し続けている。新棟に対して新設スペースなどに一定の評価をしている一方で、図書館整備の県庁・県教育委員会での検討過程の公開性や透明性が保障されていないとして、県民や利用者が望む県立図書館実現に向けて開かれた参画の場を作ることを提案した[20]。同様に図書館問題研究会も県民や市町村立図書館の意見を取り入れるべきとして、第三者会議等、合議による合理的な検討を提案している[21]。どちらも厳しい目で動向を注目し、県や関係者だけではないオープンな議論の場を求めている。

2025年(令和7年)1月の読売新聞に新棟の記事[22]が載った。新棟で開催された「大人が始める学び方講座」の講師や参加者の声を紹介し、県立図書館は生涯学習の普及や啓発、来館者のリスキリングを支援しているとした。Lib活については仲間と交流を通して知識を深める活動が始まったと紹介するのみである。Lib活が広く認知されるには時間がかかりそうである。

5. 考察

神奈川県戦後の公共施設は、終戦直後に内山岩太郎知事の文化政策で作られた建物と、高度経済成長期やバブル期にハコモノ行政で作られた建物に大きく分けられる。物不足の終戦直後に県民のために建築家が創意工夫しながら作った県立図書館や県立近代美術館と、好景気の波に乗って没個性に数多く作られた藤沢市民会館などである。両者は空間や土地と結びついた利用者の体験や記憶、すなわち思い入れの強さが違う。建物の更新時期が来て取り壊しを検討しても、思い入れのある建物には利用者から強い反対の声が上がるのは必然である。

県立図書館新棟を作った経緯は好景気に支えられたものではない。図書館の新しいあり方を具現化するものとして前川建築のエッセンスを各所に取り入れた設計が施され、旧本館に隣接した土地に建てたことで歴史の連続性を担保したハコができた。建物の保存は建物に何らかの意味づけをする文化価値の創造であり、永く使うことにより育まれる一体感、大切にしたい気持ちが建物を育てる。この先の新棟に必要なのは、価値を作る図書館の役割に意味づけをして建物の価値を創り、育てるヒトである。そこでは施設の運営に参加する主体的な利用者の存在と運営体制、そしてそれらを継承していくタイケンが重要である。図書館を育てるにはわたしたち県民が価値を創っていくことが必要ではないか。Lib活のような共創活動も始まっているが認知も広がりもこれからである。近年の図書館利用者層は意識が高い若者層が増えている。このような利用者を図書館の価値創造に巻き込んでコミュニティを作り、図書館を価値のある場所、建物として育てていくことで新棟を30年、50年と繋いでいくことが可能になる。

6. まとめ

神奈川県立図書館は、一時は図書館の機能の存続の危機に晒されながら、市民団体の働きかけもあって新たな役割を与えられた新棟を作った。建物の外観や内部には、内山岩太郎知事の意向を受けたモダニズム建築の巨匠前川國男の設計による旧本館のエッセンスを受け継いでいる。その意味において、県立図書館新棟は新たな記憶の器になる端緒についたと言える。

そして新棟が価値のあるハコとして長く使われるためには、図書館とわたしたちヒトが協力して新しいコミュニティーを創り、タイケンの場を活性化し続けることが必要である。

参考文献

- [1] 松隈洋「神奈川のモダニズム建築を生きた遺産に」『Web版有鄰 第567号』
<https://www.yurindo.co.jp/yurin/article/567/2>
- [2] 「神奈川県立図書館前川國男館写真集」『神奈川県立の図書館』
<https://www.klnet.pref.kanagawa.jp/yokohama/special-contents/photo-album/>
- [3] 日経アーキテクチャ『有名建築その後』日経BP、2009
- [4] 神奈川県教育委員会「県立図書館の再整備に向けた基本的な考え方」『神奈川県』
https://www.pref.kanagawa.jp/documents/52228/kihon_honbun.pdf
- [5] 猪谷千香『つながる図書館』筑摩書房、2014
- [6] 神奈川県「神奈川県公共施設等総合管理計画」『神奈川県』
https://www.pref.kanagawa.jp/docs/gh8/management/sougou_kanri.html
- [7] 「公共建築物の施設情報（令和5年度末時点）」『横浜市公共建築物マネジメント白書』https://www.city.yokohama.lg.jp/city-info/zaisei/fmsuishin/facility-management/hakusyo/manejiment_hakusho.html
- [8] 「公共建築物の施設情報（令和4年度分）」『相模原市オープンデータカタログサイト』
<https://opendata.city.sagamihara.kanagawa.jp/dataset/assets>
- [9] 藤岡洋保「日本のモダニズムと前川國男」『武庫川大学東京センター主催講演会シリーズ 第5回 建築家 前川國男の作品の保存と再生』,武庫川大学出版部, 2012
- [10] 橋本功「前川國男作品の保存と再生」『武庫川大学東京センター主催講演会シリーズ 第5回 建築家 前川國男の作品の保存と再生』,武庫川大学出版部, 2012
- [11] 小幡嶺介「公共施設再編における住民参加の取り組みに関する研究 一 小規模公共施設の改修事例を対象として一」『東京大学大学院新領域創成科学研究社会文化環境学専攻 修士論文』、2023
- [12] 高野洋平「公共施設計画における市民参加の持続性に関する研究」『千葉大学大学院審査学位論文』 2016
- [13] 鎌倉文華館 鶴岡ミュージアム『新しい時代のはじまり』鎌倉文華館 鶴岡ミュージアム、2019
- [14] 文化庁「横浜文化体育館」『文化庁近現代建造物緊急重点調査（建築）』
<https://www.bunka.go.jp/kindai/kenzoubutsu/research/kanagawa/013/index.html>
- [15] 「ありがとう文体 つなげよう未来へ 最後のお別れ施設見学会」『ヨコハマ経済新聞』
<https://www.hamakei.com/headline/11033/>
- [16] 藤沢市「藤沢市民会館等の再整備に向けた取組」『藤沢市』
<https://www.city.fujisawa.kanagawa.jp/c-hall/kyoiku/bunka/saiseibi/saiseibi.html>
- [17] 佐藤翔『図書館を学問する』青弓社、2024
- [18] 「神奈川県立図書館本館 2022年9月1日(木)開館」『HOW INC プレスリリース』
https://www.how-pr.co.jp/pressrelease/Kanagawa_Prefectural_Library_pressrelease202209.pdf
- [19] 山下樹子「神奈川県立図書館の新しい本館で始まった「Lib活(リブカツ)」の紹介」『人文会ニュース』2024年4月、No.146、21ページ
- [20] 神奈川の県立図書館を考える会「新しい本館の評価と開かれた対話への願い(速報版)」
https://drive.google.com/file/d/1-kmFyf5114_b8qcVkil4DGcxhtRC1HxW/view?fbclid=IwVERDUAOlxX1leHRuA2FlbQlxMABzcnRjBmFwcF9pZA8xNmM4NDc2NDI2NzAzNzAAAR6QPss9CiQQgStPanHaUWSleFYED2jAYRLq98ipxND2_OZ60vRusifhoSYfbA_aem_2sDnKaOlB75YMzC-39Dhug
- [21] 図書館問題研究会「神奈川県立図書館の再整備に関するアピール」『図書館問題研究会』
<https://tomonken.org/statement/kanagawa/>
- [22] 「県立図書館 学び直し支援」『読売新聞 横浜版』 2025.1.31朝刊、22面
※Webサイトの参照はすべて2025年12月11日